

いか。如何して王様が無くなつたのだらう？ 何とかいふ女の貴族が王位に登る筈だつていふけれど、女が王位は登るツて法はない。其様な事ツてない。何でも王位には王様が坐らなきや不好だ。王様になる者が無いんだつていふけれど、其様な筈はない。國に王様が居ないツて事はない。王様は居るんだが、何處かに隠れてござるのさ。なに、矢張國內にござるのだけれど、何か、その、御一門に故障があると

か、隣國の佛蘭西か何處か、怕いとか、何とか其處に仔細があつて隠れてござるのだらう。それとも何か別に仔細があるかな。

十二月八日

餘程役所へ行かうかと思つたが、種々仔細があつて屈托してゐたから止めた。西班牙の一件が兎角氣になつてならない。女が王様になるツて法はない。斷じて不可。第一それでは英吉利が承知しません。

それに歐羅巴全體の政治上の關係もある、埃地利の皇帝といふものもある……如何も此一件が氣になつて、これに現を抜かして、一日用が何も手に附かなかつた。マウラの話に、飯を喰ひながらも何だか甚く恍然としてゐたといふ。成程放心して皿を二枚落して粉微塵にしたやうにも思ふ。食後も恍惚してゐたが、何の得る所もなかつた。それから大方寢臺でごろ／＼して、西班牙の事ばかり考へて

ゐた。

第二千年四月四十八日

今日は非常にお目出度い日だ！ 西班牙に王様はござる。見付かつた。その王様といふのは斯くいふ拙者だ。今日になつて始めて分つた。宛然目が偶と覺めたやうな氣持がする。考へて見ると不思議でならん、如何して己は今迄九等官だ何ぞと思つてゐられたらう？ こんな途方途轍もない事が如何して頭に

浮んだらう？ 瘋癲病院へ入れると誰も言はなかつたのが見付けものだ。もう何も角も全然分つた、掌を指すが如く分つた。が、不思議さな、今迄は何も角も斯う何だか霧のやうな物に包まれてゐたのだ。トいふのも畢竟皆が人間の脳髓といふものは頭顱の中に在ると思つてゐるからで、飛んでもない間違ひさ。脳髓は裏海の方から風が持つて來たものなのに。で、まづ手始めにマウラに身分を明したところが、己

が西班牙の王様だと聞くと吃驚しやがつて、魂ひ身に添はずといふ體だつた。馬鹿な奴だ、まだ一度も西班牙の王様を見たことがないのだ。しかし、今迄時々長靴の掃除が不行届の事もあつたけれども、己は其様な事を何とも思つてやせんと言つて、慰めて置いた。何しろ相手は下司だ。高尚な事を言つたつて分りやしない。マウラは西班牙の王様といふものは皆フ # リップ二世に似てゐると思ひ込んでるの

で、驚いたんだから、己はフキリップとは違ふと、能く言つて聞かせてやつた。役所へは行かなかつた。役所なんぞの首尾は最う構はん。もう何てツたツてお断りだ。己や最う彼様な見たくでもない公文なんぞ寫しちや遣らんから。

三十月八十六日、晝夜の界

今日役所の守衛が来て、もう三週間も缺勤してるから、好加減に出勤しろと言ふのさ。まあ、一寸

洒落に出勤して見た。課長奴屹度己がお辭儀をして缺勤の言譯をするだらうと思つてたに違ないが、己は左程憤つてるやうでもない、トいつて餘まり機嫌の好くもない顔をして、平氣でチロリと其顔を見たまゝ、誰も目に入らんやうに、黙つて席に就いた。それからズツと一通り小役人共を見渡して、腹の中で、若し此處に西班牙の王様の居ることが分つたら……へ、へ、大騒が始まらうて。まづ課長からが、

今局長の前へ出ると行るやうに、丁寧にお辭儀しますから、ト思つてゐると、何だか知らんが、公文を持つて來て摘要をしろといふ。手も觸れなかつたね。其中に皆がざわつき出して、局長の御出勤だと云ふ。多くの同僚は局長の目に留りたさに、先を争つて駆出して行つたが、己は一寸も動かなかつた。局長が吾々の室を通り脱ける時も、皆は上衣の釦を掛けたが、己は知らん顔してゐた。何だ、局長な

んぞ？ 局長の前不起立するなんて、己は眞平だ。第一彼様な局長ツて有りやしない。彼はコロップで、局長ぢやない。尋常の、普通のコロップで、擧の栓になるばかりで、其より外に何の能もない人だ。一番面白かつたのは、己の署名を求めに公文を持つて來た時で、大方己が隅ツ子へ、係長何の誰と書くだらうと思つてると——お生憎様！ いつも長局の署名する中央の處へ、フェルヂナンド八世とやつて退

けた。すると、一座寂然となつて皆鞠躬如としてゐるから、手を舉げて制して、いや、敬禮なら爲すに及ばんと言つて戶外へ出て了つた。其足で直ぐ局長の官宅へ行くと、局長が留守だから、下男が入れまいとする。そこで、己が一言いつたら、彼奴呆氣に取られて了つたから、其際につかくと化粧部屋へ行つて見ると、令嬢は鏡の前に椅子に凭つてゐたつげが、躍上つて後退を始めた。が、己は西班牙

の王様といふことは明さないで、唯胸氣な奴が二人の仲に水を注しても、今に一つになつて、卿は思ひ掛けぬ幸福の身の上に成りますぞと言つて聞かせた。其上言つては妙ではないから、其だけにして戶外へ出たが、考へて見ると、女といふやつは食へぬもので。今となつて始て女の正體が分つた。古往今來女は何に惚れるものだから能く知つてゐる者はない、始て之を發見したのは己だ。女の惚るのは悪魔だ。

いや、申戯でないことさ。物理學者は女はかやうかやう云々のものだと言ふ。馬鹿な話だ。悪魔でなきや女は惚れない。一等棧敷の樹の中から、ロールネツトを向けてるから、大方あの勳章を垂げた肥満漢を見てるのだらうと思ふと、大違ひ！ その男の背後に立つてる悪魔を視てゐるのだ。悪魔が其男のフロツクの中に匿れて、其處から手を出してお出でくを極る——と、もう其男の妻に爲つ了ふ、妻に。皆

虚榮心の爲せる業だが、其虚榮心は何から起るかといへば、舌の裏に小さな腫物があるからで、其中に大さヒンの頭ほどの小さな蟲が栖んでゐる。皆豆町の何とかいふ理髮師の細工だ。名をツイ忘れたが、何でも其奴が或る産婆と共謀になつて、回々教を全世界へ弘めやうと企むでゐる。これだけは確實な話で、それが爲め佛蘭西では國民の過半が最う回々教徒になつて了つたといふ噂だ。

何日でもない。何日といふこともない日。  
 ネーフスキーの大通りを歩いたが、微行で、西班牙の王様といふ事は氣振りにも見せなかつた。まだ謁見も済まぬ中にこんな、町中で大勢の目に觸れては體面に關すると思つたからだ。謁見を躊躇するのは、まだ西班牙の國服が無い。裁縫師に逃へやうかとも思つたが、皆から話が分らない、お刺に商賣に精を出さず、相場に陥り込んだり何かして、今ぢや

大方は道普請の石を敷いて居やうといふ徒輩ばかりだ。拵へて唯つた二度しか着ない通常官服があつたから、是でマントルを作ることにしたが、彼奴等の手に掛けて不體裁な物にされつ了ふのも業腹だから人目に掛らぬやうに戸を締切つといて、己が自分の手で縫ふことにして、鉄で寸々に官服を切りこまざいた。裁方が全で違ふのだ。  
 日を忘れた。月も矢張り無いやうだ。何だか本體



が分らん。

マントルは全然縫上つて、支度は出来た。こいつを着たら、マウラがワツといつて驚いた。しかし未だ謁見する譯に行かんのは、今以て西班牙から使節が来ぬ。使節が附添はんでは見ツともない、威嚴に關する。搔くやうにして使節の來るのを待つてゐるのだ。

一日

使節の遅疑してゐるのには呆れ返る。何ぞ故障が起つたか知ら。佛蘭西でも邪魔をするンぢやないか？ 佛蘭西は一番仲の悪い國だからな。郵便局へ行つて、西班牙の使節は未だ着かぬかと聞くと、局長は大筵棒だ。何も知りやアがらない。西班牙の使節なんぞは此處には居ないが、手紙を出したいンなら、制規の郵税を拂ひなさい、いつでも受付けるツて言やアがつた。馬鹿ツ面な！ 手紙が何だ？ 手紙な

んぞが何の役に立つ？ 手紙は藥種屋の書くものだ

……  
二月の三十日、マドリッドに於て。

兎角する中に、もう西班牙へ来て了つた。やつといふ間に來て了つたので、茫然として了つた。今朝の事だが、西班牙の使節が來たから、一緒に馬車に乗つたところが、滅法疾い。變に思つてる中に、疾風の如く走るので、半時ばかりすると、最う西班牙

の國境へ來て了つたが、しかし今は歐羅巴中に鐵道が敷かれて、汽船なんでも途方もない速力を出す世の中だから、其は好いが、西班牙といふ處は妙な處で、ヒヨイと内へ入ると、其處に頭を刺つた者が大勢居る。さては貴族か兵士だなどと思つた。でなきや、頭を刺つてる筈がない。宰相が己の手を引いて案内をして呉れたが、これが怪しからん事を行ふのさ。狭い部屋へ己を突飛ばすやうにして押込んで、此處

に入つとれ、フェルヂナンド王だなんぞと言ふと、  
 酷い目に遭はずぞと曰ふ。が、これは試しに過ぎん  
 といふことをチャンと心得てるから、否だといふと、  
 宰相が己の脊中を二度棒でどやした。おッそろしく  
 痛かつたので、危なく悲鳴を揚げやうとしたが、い  
 や／＼西班牙は今だに武士道の行はれる國だ、これ  
 が何でも高位に登る時の武家の作法だツけと憶出し  
 て、押耐へた。一人になつてから、國務を視たが、

偶と氣が附いて見ると、支那と西班牙とは全く同國  
 だ。それを皆が無學で、別々の國のやうに想つてゐ  
 る。嘘と思ふなら試しに紙へ西班牙と書いてみるが  
 好い。西班牙と書いた積でも、いつか其が支那にな  
 つてるから。が、其様な事よりか、明日の事を想ふ  
 と厭になつ了ふ。明日七時に變挺な事がある。地球  
 が月に乗かる筈だ。既に此事は英國の有名な化學者  
 のウエーリントンも言つてるが、己は月の並外れて

軟かで脆いことを想ふと、心配で／＼どうもならぬ。  
 月は通例漢堡で製造するけれど、不手際千萬なもの  
 だ。英吉利が黙つて視てゐるのが不思議な位のもの  
 だ。漢堡では跛の桶屋が拵へるのだが、此奴が愚物  
 と見えて、てんで月ッていふものを知らない。瀝青  
 を塗つた綱を張つて、木油も少々は用ゐるから、地  
 球全體が厭に悪臭くなつて、鼻の孔に栓をする必要  
 が起るのだ。従て月も軟かい。餘り軟かて人が栖つ

てゐられんから、今では鼻ばかり栖つてゐる。鼻が  
 月に栖つてるから、人間は、それ、自分の鼻が見え  
 ん。地球は重たい物で、こいつが乗かつた日にや、  
 吾々の鼻は粉微塵になつて了ふと思ふと、居ても立  
 つてもゐられんから、靴下を穿き、短靴を穿き、急  
 いで参議院の議事堂へ行つた。警察の力で地球を抑  
 へつけて、月へ乗掛らせぬやうに、勅令を出さうと  
 いふ腹なんだ。議事堂には頭を剃つた貴族が澤山居

たが、此人達は物の道理を能く辨へてるから、己が、皆承はれ、地球が月に乗つからうと致す、月を救つて取らしませ、といふと、皆言下に勅旨を畏まつて、いづくと壁を攀ちて月を捉らうとすると、大宰相が入つて来た。それを見ると、皆バラく逃げ出したが、己は王様の事だから一人居残つて居ると、大宰相は棒で己を引敲いて元の部屋へ追込んで了つた。己は膽を潰したが、これが西班牙の國風だ。國

風にや王様も敵はない。

同年二月後の一月

今だに未だ西班牙といふ國の本体が分らん。國風も宮中の儀式も皆世間並を外れてゐる。どうも變挺で、不思議で、譯が分らん。今日も己は坊さんになるのは厭だつて一生懸命に喚いたけれども、無理に頭を剃られて了つた。冷水を頭から打掛けられる時には全で夢中だつた。あんな厭な想を爲たのは生れ

て初<sup>はじめ</sup>てだ。狂<sup>きちがひ</sup>人のやうになつて騒<sup>さわ</sup>いだが、大勢<sup>おほぜい</sup>に抑<sup>おさ</sup>へつけられて了<sup>しま</sup>つた。不思議<sup>ふしぎ</sup>な風習<sup>ふうしゆ</sup>で、とんと所由<sup>わけ</sup>が分<sup>わか</sup>らん。馬鹿<sup>ばか</sup>氣<sup>け</sup>きつてゐる、無意味<sup>むいみ</sup>なものだ！  
 こんな風習<sup>ふうしゆ</sup>を廢<sup>や</sup>させなかつた今迄<sup>いままで</sup>の王様<sup>わうさま</sup>の心持<sup>こころもち</sup>が己<sup>おれ</sup>には了解<sup>りやく</sup>めん。が、種々<sup>いろいろ</sup>な廉々<sup>かどく</sup>で考<sup>かんが</sup>へて見<sup>み</sup>ると、己<sup>おれ</sup>は偶然<sup>ひよつ</sup>としたら宗教裁判<sup>しうけうさいはん</sup>に罹<sup>か</sup>つたのぢやないか知<sup>し</sup>ら。すると、あの宰相<sup>さいしやう</sup>と想<sup>おも</sup>つてゐるのが差詰<sup>さしづ</sup>め大拷問<sup>たいかうもん</sup>官<sup>くわん</sup>といふ所<sup>ところ</sup>だ。唯<sup>ただ</sup>不思議<sup>ふしぎ</sup>なのは、王様<sup>わうさま</sup>が宗教裁判<sup>しうけうさいはん</sup>に

罹<sup>か</sup>る筈<sup>はず</sup>がない。尤<sup>もつと</sup>も佛蘭西<sup>フランス</sup>の所爲<sup>せゐ</sup>なら、何<sup>なん</sup>とも謂<sup>い</sup>へんけれど。殊<sup>こと</sup>にポリニヤツクと云<sup>い</sup>ふ奴<sup>やつ</sup>も居<sup>ゐ</sup>る。ポリニヤツクは厭<sup>いや</sup>な奴<sup>やつ</sup>だ！ 必<sup>かなら</sup>ず己<sup>おれ</sup>の邪魔<sup>じゃま</sup>をして死地<sup>しち</sup>に陥<sup>おとし</sup>れずんば止<sup>や</sup>まずと誓<sup>ちか</sup>つた奴<sup>やつ</sup>だ。それでかう迫害<sup>はくがい</sup>に迫害<sup>はくがい</sup>するのだらうが、へん、己<sup>おれ</sup>はチャンと知<sup>し</sup>つてゐるぞ、貴様<sup>きさま</sup>は英人<sup>えいじん</sup>の指<sup>ゆび</sup>の先<sup>さき</sup>で三番<sup>さんぱん</sup>を踊<sup>をど</sup>つてゐるのだ。英人<sup>えいじん</sup>は大<sup>だい</sup>の策士<sup>さくし</sup>だ。何處<sup>どこ</sup>へでも首<sup>くび</sup>を突<sup>つ</sup>込<sup>こ</sup>む。英吉利<sup>イギリス</sup>が烟草<sup>たばこ</sup>を嗅<sup>か</sup>ぎや、佛蘭西<sup>フランス</sup>が嚏<sup>しゃみ</sup>をする位<sup>くらか</sup>の事<sup>こと</sup>は、今<sup>いま</sup>ち

や誰でも知つてるからな。

二十五日

食乞

今日大拷問官がやつて来たが、其足音が遠くでし  
た時に、己は急いで椅子の下に匿れて了つた。彼奴  
め己の姿が見えないので、呼び出した。初は大聲で  
ポプリシチンと呼んだづけが、黙つてゐるので、今  
度はアクセンチイ、イワーノフ！ 九等官の先生！  
士族さん！ といつた。矢張黙つてゐると、フェル

狂人日記

デナンド八世、西班牙の王様！ といつて呼ぶから  
餘程首を出さうかと思つたが、考へたね、いや、其  
手は喰ふまい！ もう分りましたよ、また頭から冷  
水を打掛ける氣だらう、と思つてる中に見付かつて、  
棒で椅子の下から突き出された。厭な棒だ！ ビシ  
ヤリとやられると、途方もなく痛い。しかし棒の痛  
さも何も忘れて嬉しかつたのは今日の發見で、雄鷄  
は何の雄鷄でも皆一つ宛西班牙を持つてゐる、羽が

ひの下に隠してゐる、それが偶と知れた。大拷問官は大きに尖がつて、何だか罰を當るツて出て行つたが、幾ら憤つたつて最う睨みが利かないから、己は臍茶でゐた。彼奴は英人に使はれてる人形だもの、機械だもの。

三百四十九年三月三十日四

いや、もう／＼辛抱出来ん。酷い事をする！ 頭から冷水を打掛けるとは情けない！ 何と言つたつ

て聴いて呉れるぢやなし、願きもしなさや、耳も假さない。如何な悪い事を己が爲た？ 何爲己を此様に虐める？ この便りない己を、ま、如何しやうといふのだ？ 何が欲しいのだ？ 何にも興る物は有りやしない。あゝ、こんなに虐められちや耐らん、命が續かん、頭が燃えさうで、其處ら中の物がグル／＼廻る。助けて呉れ！ 連れてツて呉れ！ 旋風のやうに疾い馬を三疋貸して呉れ！ そら、馭者、



乗つたり、鈴も鳴れ、馬も跳擧がれ、而して此世から連出して呉れ！ どんと駈けた、何も見えぬ程駈けた！ そら／＼ひら／＼と舞騰るのが空で、遠方で光るのが星よ、森が黒い木と飛や、月も一緒に飛ぶ、鳩羽色の霧が足下に棚引いて、霧の中では絲の音が…… そら一方が海で、一方が伊太利で、そら／＼露西亞の百姓家も見える。遠方に見えるのはお母親ぢやは己の家ぢやないか？ 窓に見えるのはお母親ぢや

ないか？ 阿母さん、お前の悴は憂々目を見てゐる、助けて下され、助けて！ 切めて哀れを泣いて下され！ これさ、こんなに憂目を見てるでないか！ 便りない兒を抱締めて下され！ 己や此世に身の置處がないぞい。虐められてるぞい！ 阿母さん、病身の兒を可哀さうだと思つて下され！……とまた、アルジールの王様の鼻の下に瘤が出来たを御存じですかい？

食 乞

乞食終

明治四十二年八月十八日印刷  
明治四十二年八月廿二日發行

乞食

不許複製
定價卅八錢

著者 二葉亭四迷

東京市神田區表神保町三番地

發行者 岡三郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

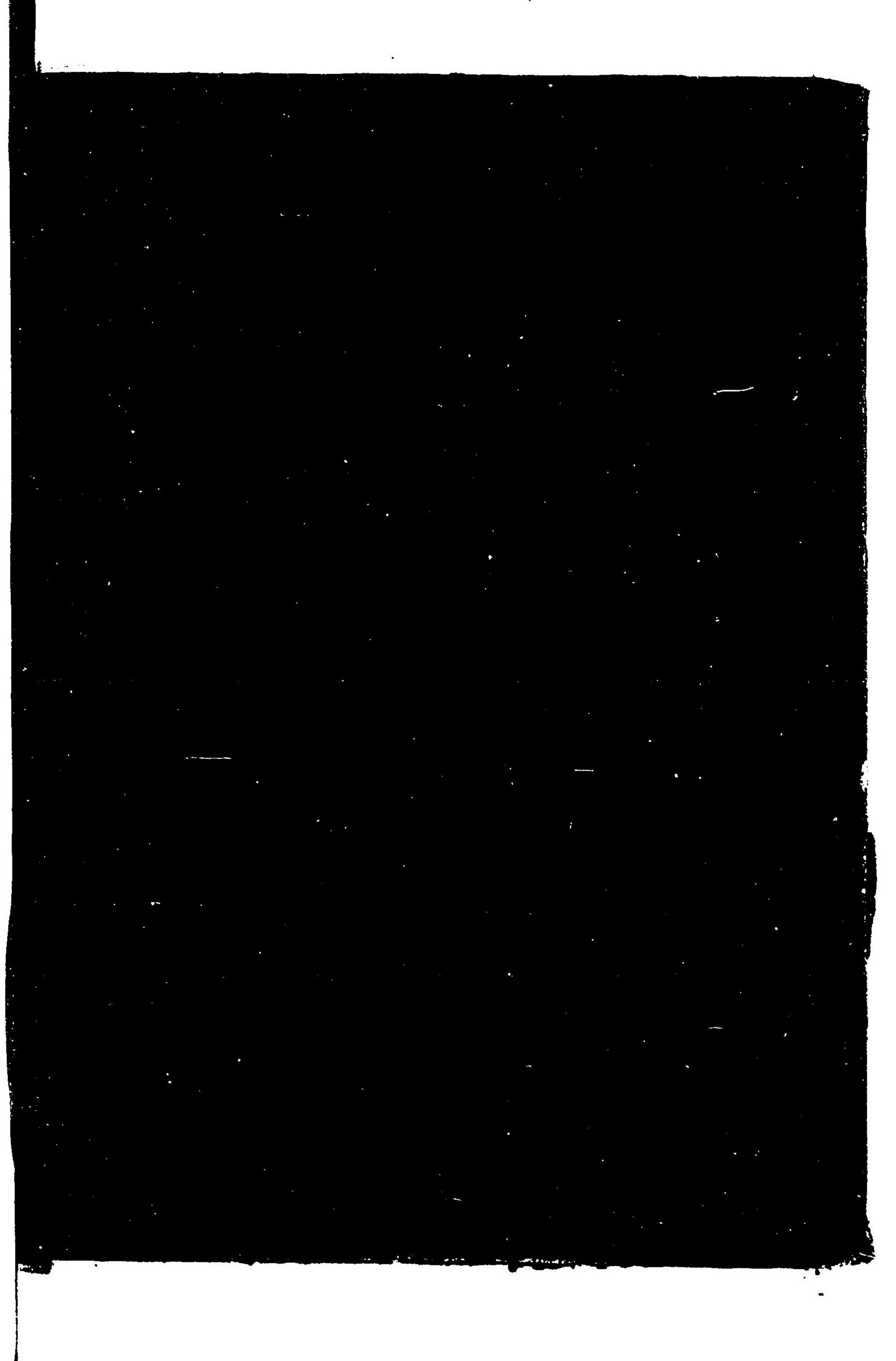
印刷者 山田英二

發行所 東京市神田區表神保町三番地  
振替貯金口座四一〇五番 彩雲閣

博文館印刷所印行

41.

94  
638



94  
638

101005-000-1

94-638

乞食

ゴーリキー/著

M42

DBY-0276



